九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『西欧の誘惑』における「オリエント・東洋」

畑, 亜弥子

https://doi.org/10.15017/10042

出版情報：Stella. 20, pp.83-90, 2001-09-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

『西欧の誘惑』における「オリエント・東洋」

畑　亜弥子

第一次世界大戦後，自らの文明の再検討をせまられた西欧の知識人たちが「オリエント・東洋」[1] に注目したことはよく知られている。マルローも東西文明の二項対立に大きな関心を示し，1927 年に両文明の対話を描いた『西欧の誘惑』[2] を発表する。これは 25 歳のフランス人 A・D と 23 歳の中国人リンとのあいだに交わされた 18 通の往復書簡という体裁のいわゆる書簡体小説である。書簡は A・D が中国を，リンがヨーロッパをそれぞれ旅するあいだに交わされたものと想定されており，小説全体をとおして「西欧」と「オリエント・東洋」の文明対話が浮かび上がるしくみになっている。これまで同作品における「オリエント・東洋」について，ジャン＝クロード・ララは，それが「当時――フロイト主義やマルクス主義が普及し一般化する前――意識をもった主体の権限や知的認識というテーマ，個々のアイデンティティ，時間・空間の認識とその表象，愛やエロティスム，個人主義や〈共産主義〉といったさまざまなテーマに取り組むさいのいわば媒介手段であった」[3] と指摘し，またダニエル・デュロゼイは「西欧人のアイデンティティを弱めたいっぽうで，共に災禍を経験したということで一致団結をもたらした大戦が終わったときに，彼らの精神の均衡とアイデンティティを再び見いだすために，西欧の意識が必要とした根本的に異なる他者」[4] と評していた。しかしながら両文明の対話のなかで「オリエント・東洋」が果たす具体的な役割についてはいまだ十分な考察がなされていないように思われる。本稿では，この点に留意しつつ，「西欧の批判者」たる「オリエント・東洋」の側面に注目したい。

*

上述のように『西欧の誘惑』は 18 通の往復書簡からなるが，小説の前半部

においてはリンからA・Dに宛てた書簡が圧倒的に多く，対話がやや不自然な印象を否めない。まず書簡がどのように構成されているか簡単に説明しておこう。はじめにA・Dの手記が紹介されたあと，第2から第7までの書簡はすべてリンからA・Dに宛てた書簡になる。第8書簡がA・Dからリンに宛てたものになるが，そのあと第9から第11まで再びリンの書簡が3通連続する。一通ずつ交互に交わされるのは第12書簡以降である。このようにリンの書簡の方が多いのは，著者マルローが中国人リンからみた西欧という視点を重視しているからのように思われる。じじつマルローはみずから執筆した作品解説のなかで，当時の西欧社会の行き詰まりについて，「われわれの文明の本質的性格は，閉鎖的な文明ということにある」[5] と表現している。さらにこのような問題を抱えた西欧文明の今後のあり方を探るためには，非西欧人の視点が必要であると述べる——

> われわれの文明のリズムの支配から逃れたり，この文明を公平な目でみたりといったことはこれを非難することのように思われる。〔…〕しかしこうした非難は不可能なものである。われわれの文明はわれわれの欲求——それがみじめなものであろうとなかろうと——によって動かされている。[6]

西欧の行き詰まりを打破するためにはその批判的検討が必要となるだろうが，西欧人自身による自己検討・自己批判には限界がある，というマルローの見解がここに確認できる。その点リンは中国人であるから，西欧文明の「リズムの支配から逃れ」これを「公平な目でみる」ことができる理想的な批判者なのである。山口俊章が「A・Dのアジア観と〔リン〕の西欧観はマルロー一個の対話」[7] と指摘するように，リンの西欧批判はマルロー自身が抱えていた問題であることは容易に推測される。マルローは小説という虚構の空間において現実的には自分にできない西欧の批判的検討を，中国人リンというフィルターをとおして行っているのだといえよう。

リンによる西欧批判は「キリスト教」「死のとらえ方」「女性の扱われ方」などさまざまな側面についておこなわれる[8]。そのなかでも最も強く批判されるのは「権力 puissance」「力 force」「行動 action」を称揚する思想である。これらをめぐって小説では有意義な文明対話が交わされているように思われる。以下にそれらを指摘・検討したい。まずはリンがA・Dに宛てた第7書簡の

一節を読もう——

〔…〕あなた方は権力（la puissance）にたいして自分の生命を捧げたのです。あなた方はあなた方自身を行動（vos actions）と一緒くたにしておられる。あなた方の思想でさえも……あなた方がほとんど理解していないことがある。それは存在するために行動する（agir）必要はないということ。そしてあなた方が世界を変えるよりは，世界があなた方を変えることの方がはるかに多いということです……。[68]

西欧では人々が「権力」に執着するゆえ，「行動」が称賛されているとリンは考えている。このような「権力への執着」・「行動の称賛」にたいする批判は第2から第7までのリンの書簡のなかでたびたび繰り返され，最も強い印象を与える西欧批判になっている。例えば第4書簡にも次のような記述がある——「いつでもあなた方は一つの目的に向かって進んでおり，それにまったく傾倒してしまっているようです。あなた方は勝とうとしています。しかしあなた方はその侘びしい勝利のもとに何を見いだそうというのでしょうか？」[67]。

マルローは先述の作品解説のなかで，西欧文明は「われわれに行動を強いる」[9] と述べている。リンによる「行動の称賛」批判は，マルロー自身が検討すべき西欧の問題であると認識しているのである。それゆえわれわれはこのリンの批判にたいするA・Dの応答のなかに，問題を解決しようとするマルローのすがたを探すことができるだろう。そこでA・Dがリンに宛てた第8書簡に注目したい。これに先行する第2から第7までの書簡は一貫してリンのものであることを考えれば，第8書簡ははじめて対話の動きが設定されている場といえる。

ここで重要なのはA・Dがリンの批判すべてに応えるのではなく，「権力への執着」・「行動の称賛」批判にたいしてのみ応じている点だ。A・Dはリンのこの批判を，西欧人が「現実」の目に見える成果にこだわっていることへの非難だと受けとめている。それゆえ第8書簡では「現実」についての考察が行われる。西欧における「現実」の重要性を認めたあと，リンは以下のように述べているのだ——

普通私たちは他人をその行為だけで判断しているが，自分についてはそうではない。統御と数字に支配されている現実の世界は，他人が動いている世界にすぎない。ところが夢想（rêverie）が，勝利の首飾りをつけて私たちの世界につきまとっているの

です。[80]

ここでA・Dは，西欧の「現実」が無味乾燥な「現実」ではなく，豊かな「夢想」の世界と混ざった領域であることを主張している。「現実」は理性や事実のみに支配されるのではなく，無意識や想像力の支配する「夢想」の世界とも関わっている。このような認識からA・Dは西欧人の行動について次のような例をあげる。英雄の映画を観ると，知らず知らずのうちに心を動かされその動作が移ってしまうことがある。また映画からだけではなく，歴史物語や小説または英雄の伝記を読んだり聞いたりしても同様の精神作用は起こりうる。つまり西欧人は幼い頃から「権力への執着」・「行動の称賛」という思想を無意識にすりこまれているのである。それゆえ西欧人はある現実的な目標に向かって行動しているときにも，ナポレオンやジュリアン・ソレルなど，「夢想」の世界のさまざまな人物のことを無意識に考えているのである。A・Dは第8書簡で，西欧におけるこのような「夢想」の重要性をさまざまな例をあげて強調する。結局A・Dは「権力への執着」・「行動の称賛」を肯定しているが，それは今まで西欧で「現実」ととらえられてきたレベルが「現実」と「夢想」が混在する領域であることを確認した上である。つまりリンの批判によって西欧の「現実」について新たな認識がもたらされているのである。

「権力」「力」の称揚が批判されるもうひとつの箇所は，第16および第17の書簡である。まずは登場する中国人の老人「ワン・ロー」が，西欧の文化や思想が中国人青年の精神的頽廃をもたらしたことを指摘している部分――

「それにしてもこの国では，もっとゆゆしき一つの悲劇が演じられているのです。それはわれわれの精神がしだいに虚ろになっていくということです……。西欧は洋服をきた中国のすべての青年たちを征服したものと思いこんでいる。ところが，彼らは西欧を憎んでいるのです。彼らは，庶民が西欧の秘密と呼んでいるもの，つまり西欧にたいする自衛の手段を，西欧から得ようとしているのです。けれども西欧は彼らを魅惑しないで彼らのうちにしみこんでいき，そのたどり着くところはあらゆる思想の虚無であること――力（sa force）についても同じであるが――を彼らに感じさせるだけなのです」[103，強調はマルロー]

ワン・ローは西欧思想によって青年たちの精神が蝕まれていく過程を説明する。それによれば，西欧思想と中国思想とははじめ拮抗しあっているが，彼ら

はこの対立の緊張感に耐えられなくなり，ついにはいずれの思想も信じられないような虚無感をおぼえるようになる。第17書簡ではこれに触発されてリンも，西欧との関わりが中国社会にもたらした弊害を指摘する——

> 中国の青年たちは西欧文化が自分たちに必要であることを知ってます。けれども彼らはまだまだ中国文化に浸っているので，これを軽蔑することはできません。彼らは中国人として止まりながら，容易に西欧文化を獲得することができると信じていたのです。〔…〕分裂していく魂の状態をどう云いあらわせばよいのでしょう？ 私のところにくる手紙はみなワン・ロー氏や私自身と同じように拠りどころのない，そして自国の文化をもたず，西欧の文化に嫌悪をかんじている青年たちからのものです……。彼らのうちには個人が生まれていました。そしてそれとともに，情熱の伴わぬ破壊と無秩序への奇妙な嗜好が生まれてきたのです。[106-107]

リンは青年たちが西欧文化・中国文化のどちらとも安定した距離をとりにくい状況におかれていることを強調する。この状況が彼らのアイデンティティの確立を非常に困難なものにし，暴力嗜好という憂慮すべき精神的頽廃を惹起しているのだ。

2書簡に現れるこのような言説はただ単に20世紀初頭の中国社会の混乱を嘆いているのではあるまい。というのも，混乱が西欧化によってもたらされたとされていることを思えば，これらの言説は長いあいだ西欧が非西欧世界，とくに「オリエント・東洋」にたいして権力を誇示してきたことにたいする批判，絶対的存在としての西欧を間接的に批判していると見なしうるからだ。それゆえ後続の第18書簡のなかで，A・Dがこの西欧批判へどのような対処の仕方をしているかを探る必要があろう。デュロゼイは，同書簡が「ナルシシストの孤独な瞑想のうちにこの作品の幕をひき，他の書簡からよりいっそう分離されているように見える」[10] と述べ，直前のリン書簡とのつながりが薄いことを指摘した。たしかに最後の書簡を一読するとそうした印象を受けることは否めない。しかしながら，マルローがここでまったく書簡の対話性を考慮しなかったとは考えにくい。最終書簡と先行2書簡とのあいだに対話の動きを探ることはあながち無駄なことではあるまい。

第16・第17の書簡でワン・ローとリンは西欧の権威を間接的に批判していた。これに対し最終書簡ではまず西欧世界における「権力 la puissance」の変容が述べられる——

脆弱さのなかにおいても法王や国王のもつ明白な権力は，今日では虚名であるといえましょう。[108]

西欧社会の内部には「権力」が崇拝されていた長い歴史があり，そのあいだ西欧は「オリエント・東洋」に対してもみずからの「権力」を安心して誇示してきたのだが，ここではそうした「権力」にたいする信頼が1920年代の西欧社会には存在しないとされている。A・Dは西欧的「権力」のあり方の変容を述べることで，ワン・ローやリンの批判に応じているのである。

さてこの後者たちの「権力」批判は，西欧社会の基盤が揺らいでいるというより全体的な問題にA・Dの目を向けさせ，ある認識をもたらしている点に意義がある。彼は，安定性を失い混乱した西欧社会に生きる者としての動揺や不安を吐露する――「神を破壊するために，そして神を破壊してしまったあとで，西欧精神は人間に対立しうるものをいっさいなくしてしまいました。その努力の終わりに到ったとき，この精神は愛する女の屍を前にしたランセのようにただ死を前にするだけなのです。〔…〕かつて西欧精神がこれほど不安な発見をしたことはなかった……」[110]。そして不安定な西欧社会に嫌気をさした彼が，最後のパラグラフで「脱・西欧」を叫ぶことばのなかに新しい認識が示されている――

〔…〕私は自分のイメージをじっとみる。私はいつまでもこのイメージを忘れることはないだろう。

変化しつづける私自身のイメージよ。私はお前に愛をもっていない。うまくふさがらない大きな傷口のように，お前は私の死せる栄光であり生ける苦悶である。私はお前にすべてを与えた。だがそれにもかかわらず，決してお前を愛することはないだろうということが私にはわかっている。私はお前に従いはしないが，お前に毎日供物として平和をもたらすだろう。貪欲な明敏さを持つ私は，いまなおまっすぐに立ちのぼるただ一筋の焔となってお前のまえで燃え続けている。沖合いから吹き寄せる風が，私の周りで不毛の海の誇らしげな潮騒を繰り返していたあの異国の夜のように，黄色い風が叫び声をあげるこの重苦しい夜のなかで……[111]

「お前tu」と呼ばれているのはA・Dの西欧人としてのイメージである。彼は自らの西欧人たる部分に嫌悪感を抱くがゆえに，自己とイメージとの分離という詩的なヴィジョンを描く。ここではイメージが否定的にとられられている。西欧人というイメージは彼にとって拒否できぬ仮面であり，葛藤しつつも共存

せざるをえないのだ。つまりこのモノローグでは「脱・西欧」が叫ばれていると同時にその不可能性が示されているが，それは「西欧」のあり方を表す点で興味深い。「西欧」という呼び名は「西欧 / オリエント・東洋」という二項対立の概念から生じているのだから，「脱・西欧」は「オリエント・東洋」を意味する。しかしA・Dは最後まで「オリエント・東洋」を単なる興味の対象として見るにとどめ，その文化や思想に共感している様子は見せていない。それゆえ彼は西欧人というイメージから逃れたいと思っていても逃れえず，このようなヴィジョンを描いているのだといえる。ここではワン・ローやリンの「権力」批判によってA・Dのアイデンティティが揺らぎ，西欧人についての哲学的な認識がもたらされているのである。

*

『西欧の誘惑』が執筆された1920年代の西欧にはアンリ・マシスのように「オリエント・東洋」の存在を危険視する知識人が少なくなかったが，マルローはこれとは違った見方をしていた。マルローは，ロバート・S・ソーンベリーが「大戦という動乱によって衰弱した西欧をアジアの思想家たちがおそらく再生させることができるだろうと考えていた」[11] と指摘したように，「オリエント・東洋」を西欧再生の手がかりを示唆してくれる好ましい存在ととらえていたのである。じっさい小説の解説には「この西欧の青年の探求の目的は，人間についての新しい概念である。アジアはわれわれに何らかの教えをもたらしてくれるだろうか？ 私はそうは思わない。むしろ我々が何であるかについての特別な発見をもたらすだろう」[12] と述べられている。本稿では「オリエント・東洋」の西欧批判が現実についての新しい認識や西欧人についての哲学的な認識をもたらしていることを確認したが，これらは「我々が何であるかについての特別な発見」の一部だと言ってさしつかえあるまい。

註

1）「オリエント・東洋」と訳したのは，いうまでもなく〈Orient〉である。ヨーロッ

パからみた東の方，近東から日本までの広い地域をさすこのフランス語の訳語として「オリエント」あるいは「東洋」だけでは不十分であり，両語をつないだ「オリエント・東洋」が適切であると判断した。

2）テクストとしてはプレイアッド版（André MALRAUX, *Œuvres complètes*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. I [1989], pp. 57–114）を使用し，引用にあたってはそのページ数を［　］内に記す。訳出は小松清・松浪信三郎訳（新潮社，1955年）によるが，文脈によっては若干の改変をほどこした。

3）Jean-Claude LARRAT, *Premières leçons sur les romans d'André Malraux*, Paris: PUF, coll. «Major Bac», 1996, p. 88.

4）«Notice» de Daniel DUROSAY pour *La Tentation de l'Occident*, in MALRAUX, *Œuvres complètes*, op. cit., t. I, p. 894.

5）«André Malraux et l'Orient», *Les Nouvelles Littéraires*, 31 juillet 1926.

6）*Idem*.

7）山口俊章『フランス一九二〇年代』，中央公論社，1978年，107頁。

8）例えばキリスト教については以下のような記述がある――「すべての愛――それが深いものであれ浅いものであれ――が磔にされた身体に集中するという思想を考えますと，どうも不安をおぼえずにいられないのです。キリスト教は，あなた方のあらゆる感動を生み出す学校のようなものに私には思われます。貴方がた個人がもっている自己意識は，そういう感動がもとになって形成されたもののように考えられるのです」[65]。また「死のとらえ方」については――「何という悲劇的な相貌をあなた方は死に与えたのでしょう！ 西欧の大都会の墓地に行くと忌まわしい感情がおのずと湧いてきます」[68]。そして「女性の扱い方」については――「中国の青年たちがあなた方の国の書物を読んでまず驚かされるのは，あなた方が女の感情を理解していると自負心を持っているように見えることです。彼らからすればそんな努力は軽蔑に値するばかりではなく，結局不成功に終わるにきまっているものです」[78]。

9）«André Malraux et l'Orient», art. cité.

10）«Notice» pour *La Tentation de l'Occident*, op. cit., p. 895.

11）Voir Robert S. THORNBERRY, «L'Orientalisme chez Malraux et Massis», in *André Malraux: unité de l'œuvre, unité de l'homme*, Paris: La Documentation française, 1989. p. 149

12）«André Malraux et l'Orient», art. cité.